

## 第5章

# 君主体制と建国記念日

——UAEにおける政治的正統性と忠誠の検討——

堀 拔 功 二

### はじめに

アラブ首長国連邦（United Arab Emirates: 以下、UAE）は湾岸君主国の一角をなしており、アラブ世界第2位の経済力を誇る経済大国でもある。豊富な石油資源の存在に加え、これまでにドバイを中心に金融や投資、貿易、観光など経済部門の多様化に成功してきた。2011年の中東政変「アラブの春」において、UAEの政情は一般的な評価として隣国のカタールと並び、中東諸国のなかで極めて安定していた国であると認識されている（Ulrichsen 2012）。いくつかの問題はあったものの、「アラブの春はUAEにいかなる犠牲も出さなかった」とさえ指摘されている（Forstenlechner, Rutledge, and Alnuaimi 2012, 56）。

しかしながら、筆者の評価は異なる。実際には国民から政治改革要求の建白書が出されており、また体制側の対応も伝統的な手法であるレント分配に加え、改革派やムスリム同胞団関係者などの徹底的な取り締まりを行うなど、政治・社会上の大きな動きがみられたからである（堀抜 2012a; 2012b）。これらの政治的な動きは、UAEでは珍しい改革運動であり、また今後の同国における君主体制と部族、政治と国民などの関係を考えていくうえで、極めて重要かつ興味深いテーマを提供してくれる。筆者はこの建白書問題とそれに

続くムスリム同胞団系組織の摘発という一連の出来事は、UAE 政治史のなかでも大きな転機として位置づけることができると考えている（堀抜 2013）。すなわち、一部の国民であれ、政治的要求を公に表明したことは極めてまれであるからだ。またこのような政治改革派の主流が、経済的に充足した中間層以上の人びとであり、社会的地位のある公務員や教員、知識人層が多く含まれていたという事実も、いわゆる「レンティア国家論」のような資源配分による政治の安定という通説では理解することができないのである（Horinuki 2013）。

ただし、チュニジアやエジプトなど他の中東諸国とは異なり、このような改革要求は国民一般から広範な支持を得ることができなかったことにも注意しなければならない。無論、それは後述するように体制側からの圧力によるところも大きい。同時に「アラブの春」によって中東地域が不安定化するなかで、国民は改革による変動よりも「安定」を選択したともいえる。UAE ではこれ以降、国内治安体制が強化されていき、とくにインターネットや SNS 上での言論の取り締まりが厳しくなったが、改革派の関係者を除いては目立った反発は起きなかった。また、2011年がちょうど UAE 建国40周年を迎える節目でもあったことから、UAE 社会のムードが次第に愛国主義的なものになっていた。メディアでは愛国主義をあおるような言説が目立ち始め、また国民のあいだからも国家や為政者に対して積極的に支持や忠誠を表明する現象がみられた。そして、毎年12月2日に迎える建国記念日（the National Day / al-Yaum al-Waṭānī）<sup>(1)</sup>が、体制と国民の双方にとって相互関係を確認する場となったのである。この時期、UAE はリビア、シリア、そして2015年にはイエメンの紛争へ軍事介入を行ったことも、国内社会の愛国主義的な雰囲気刺激した。

それでは、UAE では「アラブの春」を境に、体制と国民の相互関係がどのように変容し、両者のあいだで支配と支持をめぐりいかなる動きが起きているのであろうか。本章では、両者の関係性を確認する機会として、建国記念日に合わせて行われる一連の公式／非公式行事と、その際に国民側から表

明される忠誠や支持、およびそれらの現象や表象に着目しながら分析を行う<sup>(2)</sup>。

## 第1節 UAEにおける国家・体制・国民の現在

### 1. 君主体制の正統性と国民の支持をめぐる疑問

湾岸君主体制の安定性をめぐっては、「アラブの春」後に多くの論考が発表されている。その多くはチュニジアやエジプトなど、これまで頑健であるとされてきた権威主義体制が倒れ、君主体制の国々がなぜ生き延びたのかという問いに始まる。

従来、湾岸君主体制の正統性と安定の源泉は資源の配分であると説明されてきた。たとえば池内は、湾岸君主体制が「アラブの春」を乗り切った理由を「石油の富と、域外大国の支持という、従来からの湾岸産油国が持つ資源を縦横に用いて、アラブ諸国の君主制諸国は『アラブの春』の衝撃を当面は凌いだようである」と説明した（池内 2013, 45）。実際、「アラブの春」に際して湾岸君主体制は社会保障の拡充や雇用問題の解消、住宅建設を含む大型公共事業などを矢継ぎ早に実施し、国民の社会経済的な不満が政治化することを防ぐことにある程度は成功したといえよう（堀抜 2012b）。ただし、今日になって振り返ってみると、2011年の「アラブの春」に前後して原油価格が高水準で推移していた点は、湾岸君主体制にとっても大きな財政的な後ろ盾になったといえる。

メナルドは、歴史的にも、そして「アラブの春」に際しても、中東・北アフリカ諸国の君主体制は政治的紛争の経験が少ないことを明らかにした。また君主制の政治文化が法の支配を促進し、エリートらの財産権を保護し、経済成長を育てており、それが正統性を構築しエリートからの支持を集める要因であることを示した（Menaldo 2012）。浜中も計量的手法を用いて中東君主

体制の頑健性を示し、「アラブの春」によって体制が転換した（転換しなかった）違いについて、君主制の正統性原理と（国民の）受容態度に違いがあるのではないかと指摘した（浜中 2014, 67）。

デイヴィッドソンは、湾岸諸国における国内外の不安定要因の分析を行うなかで、君主体制崩壊のシナリオを提示した（Davidson 2012）。このシナリオそのものは明らかに結論を急ぎすぎているが、分析で取り上げる体制の不安定化要因については注意を払わなければならない。とくに、君主体制が配分機能を低下させているという指摘は、「アラブの春」から3年後に油価の低迷が始まったことを考えるとより深刻な問題となったことがわかる（Davidson 2012, 50）。体制側の配分機能の問題とは別に、国民のあいだで資源配分に対するある種の「耐性」のようなものが出現しつつあることにも気をつけなければならない。実際、筆者が別稿で論じるように、UAEで2011年に起きた「建白書事件」の中心は十分な教育を受けて経済的にも充足した中間層の知識人であり、要求の中心は個人的な困窮によるものではないことは明らかである（堀抜 2012a; Horinuki 2013）。このように、「アラブの春」に前後して君主体制と国民の関係は大きく変化しており、もはや「資源配分によって慰撫される国民」の存在を無批判に議論の前提とすることはできないのである。

## 2. UAE の政治社会における首長家と国民の関係

それでは、UAE の政治や社会のなかで、君主体制はどのように位置づけられているのであろうか。また国民は君主体制の正統性をどのように受容しているのであろうか。UAE の近代化の過程に沿ってみていきたい。

1971年に独立したUAEは、多くの近代国民国家が通った道をなぞるように、行政制度の整備や教育（国語・国史・社会科教育）などを通じてネイション・ビルディングを行い、民衆の国家への帰属や国民としての意識を高めていった<sup>(3)</sup>。建国の中心となったザーイド・ビン・スルターン・アール・ナヒ

ヤーン大統領 (Zāyid bin Sulṭān Āl Nahyān : 以下, シャイフ・ザーイド) は, 連邦国家形成の過程において自らを「大部族長」であり, 「父親」とする国家の指導像を国民に明示していった。さらに, 手厚い社会福祉を提供することによって, 伝統的に部族内でみられる首長と構成員の庇護 = 忠誠関係から, 国民を庇護されるべき「一族・子どもたち」という関係に組み替えていったのである (堀抜 2009, 90)。また教育の現場では, 歴史教育や国民教育の教科書において, シャイフ・ザーイドと UAE の建国についての知識伝達が行われており, 愛国心や国家・体制への忠誠を育む工夫がなされている。

シャイフ・ザーイドは2004年に死去したあとも, 「建国の父」や「名君」として国民のあいだで尊敬されており, 現体制下においても国民統合のシンボルとなるなど, 政治資源として機能している (Luomi 2012)。シャイフ・ザーイドに加え, アブダビ首長のハリーファ・ビン・ザーイド・アール・ナヒヤーン UAE 大統領 (Khalīfa bin Zāyid Āl Nahyān), ドバイ首長のムハンマド・ビン・ラーシド・アール・マクトゥーム UAE 副大統領兼首相 (Muḥammad bin Rāshid Āl Maktūm), そしてアブダビ皇太子のムハンマド・ビン・ザーイド・アール・ナヒヤーン; 次期 UAE 大統領候補 (Muḥammad bin Zāyid Āl Nahyān) は国家の中心として尊敬・敬意が払われる対象となっている。公共空間にはザーイド前大統領に加え, この3人にかかわるさまざまな表象を確認することができる。行政府だけではなく, ホテルや民間商業施設においても3人の肖像 (それに地元首長・皇太子の写真が加わることもある) が飾られており, また新聞紙面に掲載される日々の要人の会談風景の写真もシャイフ・ザーイドの肖像画が背景となっていることが多く, 国家権力の表象が再生産されていることがわかる。

首長と人びとの関係を考えると, 歴史的にはマジュリスの場で首長と部族代表が協議を行っていた。ところが近代国家としての UAE が成立すると, 政治権力は首長家とインナーサークルに集中し, また近代的な官僚機構が整備されていった。その結果, 首長と国民の距離は次第に離れていき, 従来部族が果たしていた意見集約という政治的役割が衰退したといわれている (大

野 1994)。ただし、政治的役割が相対的に低下したとはいえ、部族は現在でもそれ自身がひとつの政治的チャンネルとして機能している。UAE の論客であるスルターン・カースィミーは、「UAE は独特の部族的紐帯と同盟によるひとつの生態系である」と評し、今日でも国内政治に部族主義の影響があることを認めている (Al-Qassemi 2012)。またアブドゥッラーも、湾岸君主体制は今でもイスラーム、伝統、部族主義を正統性の象徴として用いていると指摘しており、体制が国内政治運営において部族にも依拠していると、その重要性を示唆している (Abdulla 2010, 13)。

このように、UAE 政治はウェーバーが述べるところの「伝統的支配」と「カリスマ的支配」、そして資源配分が相互補完的に作用しており、正統性を形作っている。今日でも、政治体制としての君主制や首長家の存在そのものは、UAE 社会のなかで広範な支持を得て受容されているといえる<sup>(4)</sup>。UAE の地元研究者は、UAE の体制・政府は人びとからの信頼を得ているとし、「合意の文化、部族の文化、首長家に対する深い尊敬がある」と指摘している。また、「豊かな社会的自由が、政治的自由に対する要求を相殺している」と、UAE の安定性を説明した (Neuhof 2011, 32)。

UAE の政治制度が変容するなかで、急速な近代化とグローバル化は UAE 社会そのものも大きく変化させた。しばしば指摘されている問題としては、ナショナル・アイデンティティの問題があり、2000年代頃から議論が活発になってきた。UAE 人口の約9割は外国人であり、このようないびつな人口構成を前に政府だけではなく、国民自身のなかからも自分たちが多数の「外国人」に埋没していく恐怖を感じ、それを表明し始めたからである。また、グローバル化が進行するなかで、アラブ、ムスリム、そして伝統的な文化の喪失や変容も危惧されていった。このような問題に対応するために、体制側はナショナル・アイデンティティ政策を打ち出していくが、これは首長家支配の正統性を再定義し、新たにこれを獲得するための方策であるといえる。すなわち、体制はこれまでに確立した首長家支配の正統性や歴史性を、伝統文化の「再発見」や「創造」を通じて補完しようとするのであった。たとえ

ば文化復興政策によって整備された博物館やヘリテージ・ヴィレッジ<sup>(5)</sup>は、単なる外国人向けの観光資源として機能するだけではなく、展示や参加を通じた国民の教育やナショナル・アイデンティティ形成が期待されているのである（Alsharekh and Springborg 2008; Cooke 2014）。さらに、UAE では2014年から新たに国民男性に対する兵役訓練義務（徴兵制）が導入された<sup>(6)</sup>。軍隊への動員を通じたネーション・ビルディングは、その方法として非常に古典的なものである。しかし、UAE が建国から40年以上も経って徴兵制を導入する背景には、忠誠心や愛国心を醸成しなければならない理由があることが指摘できる<sup>(7)</sup>。

以上のように、UAE が近代国家として成立するなかで、首長家の支配が確固たるものになっていく一方で、従来から支配の基盤としてきた国民や部族もまた変容しているのである。これは、体制側も時代や変化に合わせて統治形態を変更し、政治的正統性を獲得していかななくてはならないことを意味している。

### 3. 近代国家における祝祭の政治的意味

本章では、議論の分析枠組みとしてポデー（Podeh 2011）が論じた中東の祝祭研究を参照していきたい。改めて指摘するまでもなく、近代国家においても祝日や祭りは重要な政治的意味をもっている。「暦（カレンダー）は国家の中核となる信念体系について確かに反映するものを提供する」（Podeh 2011, 3）とあるように、祝祭は単なる休日や行事を示すだけではない。それは、国家の成立過程や記憶、支配者が国民に対して示す権力の一端が表明されているともいえる。

ポデーは、世界各国における祝祭・祭日に関する研究を手際よくまとめたなかで、祝祭がもつ意味を国家形成やネーション・ビルディングの観点から4分類した。第1に、それは国民や国家の構成員を取りまとめるためのナショナル・アイデンティティ形成のためであり、社会的統合のメカニズムであ



る。第2に、祝祭によって権力者自身が権威を確認する場を求めていることである。第3に、政治権力や権威を国民に示し、そこからの敬意・崇拝を引き出すことである。第4に、祝祭の感情的役割であり、参加する国民自身が国家への帰属を確認する機会である（Podeh 2011, 19-22）。また、国家の祝祭にあたり、国家のシンボルがさまざまな場面で利用される。共通するものには国旗、国歌、標章などがあり、「これらのシンボルは市民が国家や国民に対する忠誠心や義務を感情的な方法によって表現することを可能にする」（Podeh 2011, 29）という機能や役割が期待されている。

UAEの祝祭日は、西暦とヒジュラ暦の両方で運用されている（表5-1）。建国記念日や大統領就任記念日など世俗的な行事は西暦によって日付が固定されているが、ラマダーン（断食月）やイード・アル＝フィトル（断食明けの祭り）、マウリド（預言者ムハンマドの生誕祭）などイスラームに基づく宗教的行事はヒジュラ暦によって運用される。ラマダーンの場合には「月観測委員会」が組織され、月の満ち欠けを目視で判断したうえで、祝祭日の正式な日程が確定される。近年では、国旗の日（11月3日）や殉教者記念日（11月

表5-1 UAEの祝祭日（2015年）

日付	祝祭日
1月1日	新年*
1月3日	マウリド（預言者ムハンマドの生誕祭）
5月16日	イスラー・ワ・ミウラージュ（預言者ムハンマドの昇天祭）
6月18日	ラマダーン開始
7月17日	イード・アル＝フィトル（断食明けの祭り）
9月14日	大巡礼（ハッジ）
9月22日	アラファトの日
9月23日	イード・アル＝アドハー（犠牲祭）
10月15日	イスラーム暦新年
11月3日	国旗の日（ハリーフ大統領の就任記念日 ※非休日）*
11月30日	殉教者記念日（※非休日）*
12月2日	建国記念日*

（出所） 筆者作成。

（注） \*西暦で運用されている祝祭日。



30日)など、新たな国家的記念日(非休日)も設定されている。

本章が着目する UAE の建国記念日は、本質的には体制による国民支配のための装置である。しかしその盛り上がり方は、「たとえば、より落ち着いた雰囲気が見られるバハレーンとは対照的に、UAE における建国記念日は増大する大衆の熱狂とともに祝われている」(Patrick 2012, 54)と指摘されているように、建国記念日とそれに関連する祝賀行事は単に体制側の意図や企画に沿って国民が動員されるだけのものではなく、国民の「自発的」で積極的な参加が見られることも特徴である。すなわち、体制が目的とする正統性の獲得や形成が行われるのと同時に、国民が体制に忠誠ないしは支持を表明する機会にもなっていると考えられる。とくに建国40周年を迎えた2011年を境にして、建国記念日のあり方に変化がみられており、体制と国民の関係性を検討するための材料を提供してくれるといえるだろう。

## 第2節 建国記念日の公式／非公式行事

### 1. UAE の建国記念日の由来と概要

UAE は1971年12月2日、アブダビ、ドバイ、シャールジャ、アジュマーン、ウンム・アル＝カイワイン、フジャイラの6首長国によって建国を宣言した。この日、ドバイでは首長らが集まり、UAE 国旗を掲げるセレモニーが行われた。セレモニーが行われた場所は、現在でもドバイに「ダール・アル＝イッティハード」(連邦の家)として保存されており、国旗が掲揚されている。UAE は19世紀以降、イギリスの保護領であったが1968年にイギリスが中東からの軍事撤退を表明したことにより、現在のバハレーン、カタル、UAE は独立を模索した。UAE 建国の翌1972年2月、ラース・アル＝ハイマ首長国が UAE に加盟して、今日の7首長国体制が完成した。

UAE では11月から12月第1週にかけて、建国記念日を祝う関連行事が国

図5-1 建国記念日統一シンボル



(出所) Higher National Day Committee (<http://www.uaenationalday.ae/en/>, 2015年1月20日最終閲覧)。

内各地で開催され、政府主催の公式行事と、民間団体や企業が建国記念日に合わせて行う非公式行事がある。公式には、文化・青少年・地域開発省 (Ministry of Culture, Youth, and Regional Development) が建国記念日の行事・企画などを管轄している。UAE は2011年に建国40周年を迎えた。この時、40年前にドバイで撮影された首長の集合写真をイメージした統一シンボル<sup>(8)</sup>とロゴ「連邦の精神」が採用され、今日においても用いられている (図5-1)。

以下では、建国記念日に行われる行事を公式行事と非公式行事に分けて検討していく。

## 2. 公式行事

建国記念日における公式行事とは、体制が国民から忠誠を獲得したり、愛国心の涵養やナショナル・アイデンティティの形成などの目的をもって行われている。それでは、具体的にどのような公式／非公式の行事が行われているのであろうか。2014年および2015年の建国記念日の事例を中心に整理・記

述する。

建国記念日で最も重要な行事は、7首長が集まる最高評議会の開催である。最高評議会とはUAEの最高意思決定機関として憲法に規定されているが、今日では機能しておらず、象徴的な意味合いが強い。しかし、連邦国家樹立の日に首長が一堂に会することは、たとえセレモニーであっても重要な政治的意味をもつといえる。ところが、2014年の第43回建国記念日に際しては、本来開催されるべきはずの最高評議会が開催されなかった。それは、ハリーファ大統領が同年1月末に脳卒中で倒れており、それ以来長らく姿を見えていなかったからである。2015年の第44回建国記念日でも、最高評議会が開催されることはなかった<sup>(9)</sup>。

また、例年首都アブダビでは首長家・政府要人や国民を集めた公式祝賀行事が開催される。2014年は最高評議会が開催されなかったが、6首長とムハンマド・ビン・ザーイド・アブダビ皇太子が集まる機会として軍事パレードの観閲がアブダビ・エキシビションセンターの特設会場で行われた。来賓にはモロッコのムハンマド6世国王(Muḥammad VI)が招待された。式典が佳境に差し掛かるとラズファ(razfa)という伝統舞踊が披露され、踊りの輪のなかに首長らが剣や銃をもって加わるのであった。このほか、各首長国の皇太子が同じくアブダビに集い、UAE国旗を掲揚する行事も行われた。2015年は公式祝賀行事として、UAEの建国から発展の過程を描くミュージカルが、同じくアブダビにあるザーイド・スポーツ・シティのスタジアムで開催された。やはりこの年もムハンマド6世国王が国賓として招待されており、ムハンマド・ビン・ラーシド副大統領やムハンマド・アブダビ皇太子らとともに出席している。このような公式祝賀行事は、建国記念日のなかでも中心的な行事として位置づけられているといえる。

2015年はさらに、大統領府主催の部族行進「統一の行進」(Masīr al-Ittiḥād)が新たに行われた。全国から集まった主要部族の男性メンバーたちが、部族名の書かれたボードを掲げ、国旗の小旗を振ったり国旗カラーのストールをまとい歌い踊りながら首長や皇太子の前を行進し、体制に忠誠を示すもので

ある。参加部族数については公式の発表はないが、筆者が映像をもとに確認したところによると、バニー・ヤースやアル＝シフーフ、マナーシールなど判明分だけで35部族の参加があった<sup>(10)</sup>。また、式典のハイライトにはアル＝アーズイー (al-‘āzī) という詩の朗誦が行われた。従来も建国記念日に際して、首長らの前でヨウラやラズファ、アイヤーラなどの伝統舞踊を披露したり行進する行事はあったが、部族名を明示しながら行進すること、さらにはそれが大統領府による大掛かりな動員によって行われたことは、恐らく2015年が初めてのケースであろう。

このほかの公式行事として、市民向けのイベントやコンサートも各地で開催された。ショッピング・モールの一角には、文化・青少年・地域開発省によって UAE の歴史や発展を展示するイベント・スペースが設置されたり、ヘリテージ・ヴィレッジ等でも伝統文化・芸能などの実演が行われた（写真5-1・5-2）。UAE 国外においても、在外 UAE 大使館主催の建国記念日祝賀式典が開催されており、後日その様子が国営通信などを通じて配信される<sup>(11)</sup>。また、多数の住民を対象としたイベントには、中心部での花火大会がある。12月2日の建国記念日当日、アブダビでは海岸通り（コルニーシュ）で花火大会が開催された。夕方頃から通り沿いの公園や広場に大勢の人が集まりだし、ピクニックやバーベキューをしながら日が暮れるのを待っていた。また、

写真5-1 ショッピング・モールの  
イベント・スペース



2014年11月 ドバイにて筆者撮影。

写真5-2 ヘリテージ・ヴィレッジ  
における伝統芸能の実演



2014年11月 アブダビにて筆者撮影。

写真5-3 建国記念日の街中の光景



2014年12月 アブダビにて筆者撮影。

写真5-4 国旗で装飾される住宅



2014年11月 アブダビにて筆者撮影。

子どもたちはコルニーシュ通りを通る自動車や通行人をパーティー用スプレーで次々に「襲撃」しており、街中が祝祭の雰囲気に包まれていた（写真5-3）。

建国記念日に際して、街中が装飾される。このような装飾についても、建国記念日を演出する機能があり、公的な行事とみなされるべきであろう。市内の主要な道路や政府・省庁の建物は電飾やプロジェクション・マッピングで飾られた。また、民間のビルや一般の住宅には UAE 国旗が掲揚された。2013年には、政府が11月3日<sup>12)</sup>を「国旗の日」として設定したこともあり、翌月まで多くの住宅が引き続き国旗を掲揚していたと考えられる（写真5-4）。

### 3. 非公式行事

非公式行事には建国記念日を祝い、政府以外のアクターが自発的に行うイベントや、関連する現象がある。非公式行事のなかには、国民が部族単位で体制に対して忠誠を誓うかのような現象や表象がみられる。

注目すべき行事には部族単位で行われる祝賀行事（部族集会）がある。UAE の主要部族が郊外にテントを張り、建国記念日を祝い、国家や首長家に忠誠を表明するものである。首長家関係者は日常的に冠婚葬祭や招待に応

じて地元民の家を訪問することがあるが、建国記念日に開かれる部族集会は、2011年以降にあらわれた比較的新しい現象である<sup>(13)</sup>。集会には首長家要人が来賓として招待され、部族メンバーによる行進や伝統舞踊が披露される。また演説や詩の朗誦が行われ、国家や指導者への感謝や忠誠が示されている<sup>(14)</sup>。部族集会の様子はメディアにも取り上げられるため、体制側からみると国民から首長家への支持が表明されていることの宣伝になり、また部族側からみると忠君愛国的な姿勢を示すことができるといえる。このように部族集会は、伝統的な形式を装いながら体制との交流を図る現代的な政治的チャンネルなのである。部族集会は主催者にとっても一大イベントであるようで、大掛かりなものになると実行委員会まで組織されており、年々規模が拡大している<sup>(15)</sup>。

さらに部族集会と同様に注目すべき現象としては、新聞に出稿する祝賀広告がある。建国記念日に合わせて部族や個人が祝賀広告を新聞に出稿し、ハリーファ大統領、ムハンマド副大統領、ムハンマド・アブダビ皇太子、および各首長に対する祝意を表明している（図5-2）。このような「部族広告」は、2011年の建白書問題をきっかけに、主要部族が体制に対する忠誠を表明するために行われるようになった（堀抜 2012a, 6）。筆者の集計によると、2010年11月下旬から12月上旬にかけて現地紙『アル=イッティハード』（*al-Ittiḥād*）に部族名で出稿された祝賀広告はわずかに7件であったのが、2011年の同時期には54件（うち22件は全面カラー刷り）と大幅に増加している<sup>(16)</sup>。この時期以降、各部族がイードや建国記念日など国家的祝祭日に合わせて祝賀広告を出稿する現象が常態化している（図5-3）<sup>(17)</sup>。この現象も、建国記念日の非公式行事として重要である。

非公式行事は、何も部族単位だけで行われるだけではなく、個人としての参加もある。建国記念日の時期になると、街中を走る自動車にもある変化が起こる。それは、自動車の車体を UAE の国旗カラー（赤・緑・白・黒）に塗装したり、窓ガラスや車体全体に首長家要人の顔写真を印刷した特殊なステッカーを張ってラッピングするなど、装飾を施すことである（写真5-5）<sup>(18)</sup>。

図5-2 スアイム部族の祝賀広告



(出所) *al-Ittihad*, December 1, 2014.

写真5-5 カーラッピング



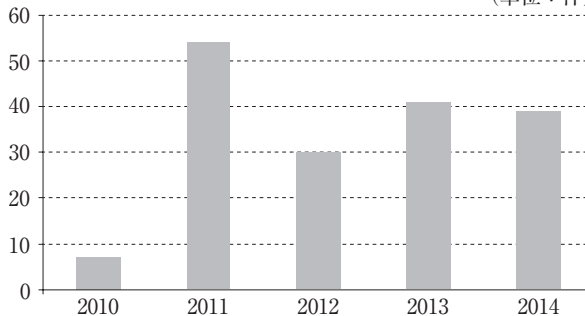
2014年11月 ドバイにて筆者撮影。

写真5-6 建国記念日グッズの販売



2014年11月 アブダビにて筆者撮影。

図5-3 建国記念日の部族祝賀広告数の推移 (2010～2014年)  
(単位: 件)



(出所) *al-Ittihad* 紙(各年11月15日～12月8日までの広告数を集計)。



筆者の2014年の観察によると、シャイフ・ザーイドの肖像が比較的広範に用いられており、これに並んで大統領・副大統領・アブダビ皇太子の3人が登場する頻度も高かった。また、首長国ごとのナンバープレートによっては、地元首長の写真をデザインに使用している自動車もあるなど、所有者がデザインの個性だけでなく、体制への敬意ないしは敬愛を表現するかのようであった。カーラッピングについては、そのデザインを競うコンテストが開催されるなど年々盛んになってきており、建国記念日の非公式行事として定着しつつある。そのため、建国記念日の前には、安全性の観点からカーラッピングに関する規定と警告が内務省から発出されるようになった<sup>(19)</sup>。興味深いのは、このようにカーラッピングをするのはUAE国民だけに限らず、外国人住民のなかにもいる点である。

今日、建国記念日はUAEの消費文化とも密接に関係し、そのなかに取り込まれている。ショッピング・モールやスーパーでは、「建国記念日セール」が開催される。ショッピング・モール全体はUAE国旗のカラーに包まれ、店舗のショーウィンドウでも建国記念日を祝うディスプレイがなされる。また、スーパーには特設スペースが設けられ、その一角では大小のUAE国旗や衣装、建国記念日関連のグッズを売り出していた（写真5-6）。UAEは外国人人口が多く、最近ではバレンタインデーやクリスマスに合わせたセールが頻繁に行われている。小売業界にとっては、建国記念日はクリスマスなどと同様に、売り上げ増が見込まれる年間行事のひとつであるといえるだろう。

このように、建国記念日に向けて街中が祝祭の雰囲気包まれる。非公式行事も、そのような雰囲気を醸成し、また装飾された自動車やショッピング・モールもこれを演出している。したがって、このような国民が「自発的」に行っている非公式行事、とりわけ部族単位で行われる部族集会や部族祝賀広告、また個人が行うカーラッピングは、建国記念日を通じた体制への「支持」の表明として検討する余地があるだろう。

### 第3節 UAEにおける建国記念日の役割

#### 1. UAE 国民にとっての建国記念日

第2節では、UAEにおける建国記念日の関連行事を公式／非公式の観点から分類・整理した。以下では、現代UAEの文脈のなかで、建国記念日の位置づけやそれがもつ意味、また建国記念日がネイション・ビルディングや社会にとってどのような役割を担っているのか、第1節で指摘したポデーの祝祭の政治的意味に関する4分類に従い検討していく。

第1に、ナショナル・アイデンティティ形成の役割である。公式／非公式の行事を通じ、UAEの歴史や国家形成について多くのメディアで特集が組まれ、建国・発展の記憶を世代を超えて国民のあいだに共有・継承しようとする。これらの行事はとくに若者に対して、石油が発見されていなかった頃の貧しい風景を示し、今日の豊かな生活が先人の努力や「賢明な君主」によってもたらされたものであることを教育する。その際、昔の生活を再現したヘリテージ・ヴィレージの展示や建国前後の映像資料が用いられるが、若者や子どもに対して現在の生活水準とのちがいを直接的に訴える効果がある。また、アイヤーラやラズファ、ヨウラなどの伝統舞踊は、身体性を伴うかたちで伝統を共有・継承するものといえる。

第2に、首長・首長家が政治的権威を確認する役割である。建国記念日に際してみられる部族集会や部族祝賀広告は、その典型であるといえよう。すなわち、非公式な行事として出現し始めたこれらの現象をみると、部族単位で国家と首長家に自発的なかたちで忠誠や敬意が表明されていることがわかる。当然、部族としてはその見返りに体制からの庇護や何らかの支援を期待している。また若者を中心に広がるカーラッピングは、現象としてはある種の「ファッション」であり、デザインやオリジナリティを競う側面が強い。ただし、これも体制の政治的権威に対する忠誠や追認、敬意の表明の一形態

でもあり、為政者の肖像が国家のシンボルとして社会のなかで幅広く再生産される現象でもある。たとえば、アブダビ観光文化庁（Abu Dhabi Tourism & Culture Authority）の建国記念日担当者は、「UAE 国民は非常に愛国的であり、またわれわれの多くが自動車に夢中である」とし、これらの要因が建国記念日と結び付いて UAE の国旗色のもとでひとつの社会として集合すると指摘している（*Emirates* 24/7, November 27, 2012）。

第3に、政治権力や権威を国民に示す役割である。建国記念日には国民にとって重要な政策が発表されることが多く、人びとの注目を集める。この時期、大統領や首長らは建国記念日を祝う談話を発表しており、このなかで UAE が直面する国家的課題や将来的な成長・発展のための戦略を示している。2005年の建国記念日に際し、前年に就任したばかりのハリーフア大統領は翌2006年に同国史上初となる議会選挙を実施することを発表した（堀抜 2011, 74）。また、2007年には翌2008年を「ナショナル・アイデンティティの年」とすることを発表している（堀抜 2011, 167）。また例年、建国記念日はイードと同様に服役囚に対する恩赦が与えられることが多い。2011年には「建白書問題」で逮捕・起訴され11月に実刑が確定したばかりの UAE 人被告に対して、判決の翌日に恩赦を与えて釈放した。このように、建国記念日は UAE 政治において体制が政治権力を示す重要な機会である。

第4に、感情的な方法で国民が国家への帰属を確認する役割である。UAE は歴史的に、また建国以後も、国民全体で共有される体験に乏しい。たとえば、クウェートは1990年にイラクから侵攻され、多くの死傷者が出るなかで抵抗し、多国籍軍の助けによって解放されたという経緯があるが、UAE は国家存亡の危機に立たされたことはない。しかし、「アラブの春」以降の域内の政治変動と UAE 国内のムスリム同胞団問題を受けて、治安・安全保障に対する危機感が体制・政府内で高まっている。建国記念日に際し、地元テレビではさまざまなテレビ CM が放映されていた。このなかには、軍隊や警察、消防など国家の安全を守る人びとに焦点を当てたものもあり、国歌や国旗の映像とともに軍事訓練の風景が組み合わせられ、単なる CM の域を超

えたプロモーション・ビデオとして完成されている。そこには、「強い UAE 国家」像を示し、見る者の感情に訴えようとする意図がみえる。さらに、CM や公式／非公式行事の場で掲げられる国旗、そしてそこで歌われる国歌も、UAE 国民の帰属意識を感情的に刺激するのである。とくに2015年はイエメン内戦への介入の結果、UAE 軍は70人を超す戦死者（殉教者）を出し、さらに建国記念日の数日前に「殉教者記念日」という新たな祝日が設けられたこともあり、より感情的に国民の帰属意識を確認することになった（堀抜 2016）。

表5-2にまとめられるように、UAE において建国記念日は体制と国民が一定の目的をもって行っている。体制は公式行事への国民の参加や動員を通じて、統治の正統性を再生産したり、ナショナル・アイデンティティの形成を試みている。また、国民は建国記念日を祝い、公式／非公式行事への参加を通じて体制に忠誠ないしは支持を示そうとしていることがわかる。

表5-2 建国記念日の公式／非公式行事と目的

	内容	目的
公式行事	最高評議会	連邦体制の結束の確認
	公式祝賀行事（2015年）	国威発揚、政治的権威・権力の確認
	軍事パレード（2014年）	国威発揚、政治的権威・権力の確認
	統一の行進（部族行進：2015年）	（体制）政治的権威・権力の確認、（国民）忠誠・支持の表明
	歴史遺産関連行事	建国史の確認、ナショナル・アイデンティティ形成
	恩赦	政治的権威・権力の確認
	その他関連イベント （国旗の日：11月3日：2013年～） （殉教者記念日：11月30日：2015年～）	娯楽の提供、国民・国家の一体感の醸成 国旗の掲揚を通じた愛国心の涵養 殉教者の称揚を通じた愛国心の涵養
非公式行事	部族集会	体制への忠誠・支持の表明
	部族祝賀広告	体制への忠誠・支持の表明
	カーラッピング	体制への忠誠・支持の表明、ファッション、消費文化
	建国記念日セール	消費文化

（出所） 筆者作成。

## 2. 体制への支持をどう読み解くか？

建国記念日で観察することができた体制への忠誠や支持とみられる現象や表象をもって、国民が体制と政治的正統性を受容していると断定することは難しい<sup>20)</sup>。しかし、ここで重要なことは忠誠の真偽を問うことではなく、なぜ国民の側は建国記念日の機会に体制への忠誠や支持を表明しようとするのかを検討することである。

冒頭で指摘したように、UAE は「アラブの春」によって大きな政治変動を経験した。無論それは他の中東諸国が経験したような体制転換を伴うものではないが、同国史上初めて一部の国民が公に政治のあり方を批判し、改革を求めたのである。問題の原因は、本来利害調整を行う公式制度であるはずの議会に立法権が与えられず、また政府・体制側に十分に意見が表明できない点である。たとえば他の権威主義体制国やクウェートなど、議会が機能する国では、体制は議会を通じて利害調整を行ったり、また野党や反政府勢力を取り込む（コ-optーション）ことができる。ところが、UAE の場合は議会が体制・政府と国民のあいだの交渉の場として機能していないため、政府の側にとっても公式の政治制度を通じた交渉ができないのである。さらに、国民の要求の争点は政治改革そのものであり、資源配分で対応可能な経済的動機に基づくものではなかったことも、体制側の対応が難しい点であった。そのため、体制側としても秘密警察など暴力を使って抑え込む手段を採用するしかなかった。

そして、2011年に建白書問題が起きた際、国内社会に新しい動きが確認された。それは、体制側が部族を通じて締め付けを行い、部族側は体制への忠誠・支持を表明することによって安全を確保したことである（堀抜 2012a）。2011年4月末頃から5月中旬にかけて、国内のアラビア語紙に部族会議の招集を呼び掛ける広告が出稿された。広告の出稿は部族単位で行われており、部族メンバーに対して会議への参加を呼び掛けるものであった。部族会議で

は建白書問題などが議題にされていたようで、ある部族長は「いかなる部族のメンバーも個人としてはあり得ない。男性も女性も、メンバーは部族を代表して発言できない」として、建白書への署名が部族全体を代表するものではないと批判した（*The National*, May 4, 2011）。その後、5月中旬以降は大統領・首長らに忠誠を誓う新聞広告が、同じく部族単位で地元新聞に出稿された。これ以降、ラマダーンや建国記念日等の重要な行事に際して、部族が忠誠や祝意を表明するケースが増えている。

したがって、建国記念日における忠誠や支持をめぐる現象や表象は、「アラブの春」後に部族側が体制からの締め付けや圧力を回避するために行った生存戦略であると理解することができる。アブドゥッラーが指摘するように、湾岸諸国で拡大する中間層とはグッド・ガバナンスや民主化を求める勢力であるのと同時に、その多くが賃金をもらう官僚やテクノクラートであり、政府への帰属や身分、特権を享受している。そのため、彼らは（体制からの圧力に）臆病で職業の安定性を望んでいるために、古い部族や古い世代と同じように体制や支配家系に政治的に忠実であるといえる（Abdulla 2010, 3-16）。したがって、国民は部族という政治的チャンネルを通じて、建国記念日などの国家行事の場で忠誠を表明するのであった。

ただし、別の見方をすると、冒頭で指摘したように国民は改革ではなくて現状維持による国家・社会の安定や安全を選択したともいえる。すなわち、体制に対する忠誠を表明し、現状維持を支持することは、単に自分たちが所属する部族が体制からの庇護を受けるだけでなく、政治改革によって生じる不利益を避け、国家の安定を求めたのである。この点についてはさらなる論証が必要であるが、UAEにおける君主体制の今日的意義を考えるとすれば、それはまさに国民が求める国家の安全や社会経済の安定を提供する政治主体としての存在なのである<sup>(21)</sup>。

## おわりに

本章では、「アラブの春」後の UAE における体制と国民の関係性の変化について検討した。UAE は「アラブの春」によって国内で政治改革運動が起こり、その揺り戻しで体制による改革派勢力とムスリム同胞団系組織への締め付けが行われた。一連の出来事と体制側の対応は、体制と国民の関係が従来の資源配分に基づく伝統的な支配・被支配の関係から変容し始めていることを示唆している。

本章が事例として扱う UAE の建国記念日を検討してみると、双方の関係性をみることができた。体制側からすると、建国記念日は本質的に支配のための道具であり、国内各地で行われる公式行事は、国民からの政治的正統性を獲得したり、また支配体制としての首長家の政治的権威を確認したり、さらにはナショナル・アイデンティティの形成が期待されている。また国民側からすると、建国記念日は単なる国家的祝祭日のひとつではなく、体制や首長家への忠誠を表明する場であることが分かった。なぜ国民が建国記念日の公式／非公式の行事を通じて積極的に体制への支持や忠誠を表明するのかといえば、「アラブの春」以降に体制から社会にかけている政治的圧力をかわすためであり、同時に政治的な変化ではなく国家の安定を望んでいるという意思の表明であるともいえる。このとき、UAE 政治のなかですでにその影響が低下したと考えられていた部族が、今日においても政治的チャンネルとして機能しており、体制と国民をつないでいることが確認された。

このようにして、UAE は「アラブの春」の政治的影響を受けながらも、体制はその安定性を保つことができたのである。また国民は首長家支配の政治的正統性を容認し、支持や忠誠を表明することによって、体制からの政治的圧力をかわすだけでなく、政治的・社会的な安定を享受した。この互酬的な関係性は、UAE に特殊なものではなく、多くの湾岸君主体制においても共通するといえるだろう。



〔注〕

- (1) 字義どおりにとらえると「国家の日」「祖国の日」であるが、本章では1971年12月2日に UAE が建国した歴史を考慮し、「建国記念日」の訳語をあてる。
- (2) 本章執筆にあたり、2014年11月22日から12月4日にかけて UAE およびカタールで現地調査を行った。本章の主題である建国記念日の行事に関しては、おもにアブダビ首長国およびドバイ首長国での調査に基づく記述となる。
- (3) UAE における国民形成については、堀抜 (2009; 2011) に詳しい。
- (4) 「アラブの春」の際、Facebook 等の SNS 上では UAE 体制批判の投稿が複数確認された。その一方で、筆者が聞き取りした UAE の政治改革派のひとりとは「我々は皆、首長家の支持者である」と述べ、君主体制そのものについては否定していなかった (堀抜 2012a, 9)。
- (5) ヘリテージ・ヴィレッジとは、昔ながらの生活風景を再現したり体験できる学習・観光施設である。地元民にとっては、昔の生活を懐かしんだり追体験することができ、また観光客にとっては UAE などの歴史にふれることができる。アブダビやドバイなど各地に設けられている。
- (6) 2014年6月7日、ハリーフア大統領は連邦法2014年第6号「兵役義務法」を公布した。これによると、18歳から30歳までの UAE 国民男性は兵役訓練への参加が義務づけられており、不参加や法律への違反には厳罰が課される (女性は無条件免除)。また、兵役訓練を終えた者には、公務員職への就職や奨学金給付において優先的な扱いを与えることも検討されている。
- (7) 2014年6月16日、アブダビにおいて徴兵制に関するシンポジウムが開催された。このなかで、パネリストのひとりであったムハンマド・ムッラ連邦国民評議会議長 (Muhammad al-Murr) は、徴兵制は若い国民のあいだで愛国心とナショナル・アイデンティティを強化するとの見解を示した (*Gulf News*, June 16, 2014)。
- (8) なお、この統一シンボル制作の過程については、佐藤 (2014) が詳しい。
- (9) このほか、ラマダーンやイードに際しての首長級の集まりにも姿をみせていない。さらに、2014年は本来であれば大統領任期の更新手続きのために最高評議会の開催が必要であったが、結局のところそれは開かれることなく、ハリーフアは大統領職にとどまっている。
- (10) 参照した映像資料 (<https://www.youtube.com/watch?v=LRE4ixkugsI>, 2017年7月7日最終閲覧) は不鮮明で参加部族名を読み取れない部分もあった。恐らく50程度の部族が参加したと考えられる。
- (11) 日本では例年、12月2日前後に東京都内のホテルにおいて在京 UAE 大使館主催の祝賀レセプションが開催されている。レセプションには UAE 大使が出席し、各国大使のほか日本政府関係者や、ビジネス関係者など多数が招待されている。

- (12) ハリーファ大統領の就任日（2004年11月3日）を祝う日として設置された。  
ただし、公的な休日にはなっていない。
- (13) ハーリド・アル＝ミザイニー・カタル大学助教に対する筆者による聞き取り調査（2014年11月24日於ドーハ）。
- (14) たとえば、アブダビのバニー・ヤース部族連合は2014年11月30日に部族集会を開催した。この時、サイフ・ビン・ザード・アール・ナヒヤーン（Saif bin Zāyid Āl Nahyān）副首相兼内相とハーミド・ビン・ザード・アール・ナヒヤーン・アブダビ（Hāmid bin Zāyid Āl Nahyān）皇太子府長官ら首長家要人が招待された。部族集会にはバニー・ヤース部族連合に所属する約40の部族・支族から1万人近い人びとが参加した。“Saif bin Zayed and Hamed bin Zayed Attend the Bani Yas Tribe Celebrations of the 43rd UAE National Day” (<https://www.moi.gov.ae/en/media.center/News/News160.aspx>)。アブダビ首長家のナヒヤーン家は、歴史的にこのバニー・ヤース部族連合の中心であった。
- (15) 部族集会はテントやステージなどが設営されており、多額の費用がかかっている。そのため、主宰する部族の社会的・経済的な立場も示していると考えられる。
- (16) *al-Ittihad* 紙 2010年11月20日～12月7日付け、および2011年11月20日～12月8日付けまでを対象に集計した。原則として部族名で出稿されたものを集計の対象としており、個人名で出稿されたものは除外した。
- (17) UAEにおいて祝祭日や政治的人事、要人の結婚や死亡に際して祝賀・弔意広告が出稿されることは珍しいことではない。とくに、現地企業や外資系企業などは積極的に出稿している。これに加えて、個人（または個人名＋～の子どもたち）の名義や部族名義で出稿されることもある。2011年のUAEでの政治変動を受けて、祝祭日に部族名義で祝賀広告が出稿するケースは明らかに増えている。
- (18) 車体の塗装やラッピングは、装飾する窓ガラスの数やボディーの大きさなどによって異なるという。筆者の聞き取りによると、アブダビのある自動車アクセサリ販売ショップでは、車両の左右および後ろの窓の3面をデコレーションすると300ディルハム（約9300円：当時 [以下、同じ]）かかり、車体全体の色を変えるところまでいくと800ディルハム（約2万4800円）かかるという（2014年12月29日、筆者によるアブダビ市内の自動車修理工場での聞き取り調査）。また、アル＝アラビヤの報道によると、なかには10万ディルハム以上（約310万円）の費用をかけてカーラッピングをする者もいるようである（*al-Arabiya*, November 21, 2012）。
- (19) 建国記念日のカーラッピングとそれを披露する「パレード」については、お祭り騒ぎとして容認される一方で、警察によって厳しく取り締まられている。2012年の建国記念日に際し、アブダビ首長国内では約600台の自動車が

違反車両として取り締まりを受けた (*The National*, December 9, 2012)。

- (20) 一方でポデーが指摘するように、新聞広告は新しい形の「パイア」(為政者に対する忠誠の誓い)であると見なすこともできるだろう (Podeh 2011, 40)。
- (21) アブドゥッラーは湾岸諸国において、ときに民主化と(国家の)安全・安定が故意に交換されてきたとみえる述べている (Abdulla 2010, 21)。また筆者がこれまでに複数回 UAE の改革派に聞き取りしたなかでも、しばしば国民は周辺環境に不安を感じており、国家や政治社会の安定を望んでいると指摘された。

### 〔参考文献〕

#### <日本語文献>

- 池内恵 2013. 「『石油君主国』とその庇護者——アラブ世界の君主制はなぜ倒れないか(下)——」『UP』42(7) 7月 39-46.
- 大野元裕 1994. 「湾岸における社会的変遷と民主化の動き——UAEにおける民主化の経験——」『国際大学中東研究所紀要』8, 3月 139-162.
- 佐藤尚平 2014. 「国家と集合的記憶——UAE 建国40周年記念ロゴの謎——」『UAE』55, 3月 7-10.
- 浜中新吾 2014. 「中東諸国の体制転換／非転換の論理」日本比較政治学会編『体制転換／非転換の比較政治』ミネルヴァ書房 49-77.
- 堀抜功二 2009. 「アラブ首長国連邦における国家変容と『国民』形成——国籍法と結婚基金政策を事例に——」『日本中東学会年報』25(1) 83-111.
- 2011. 「アラブ首長国連邦における国家運営と社会変容——『国民マイノリティ国家』の形成と発展——」学位申請論文(京都大学).
- 2012a. 「UAEにおける政治改革運動と体制の危機認識——2011年の建白書事件を事例に——」(佐藤寛編「アラブの春とアラビア半島の将来」機動調査研究報告書 アジア経済研究所 1-14 [http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Download/Kidou/2012\\_arab.html](http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Download/Kidou/2012_arab.html)).
- 2012b. 「湾岸の春? ——GCC 諸国における政治変動・体制・国民——」日本国際問題研究所編『中東政治変動の研究——「アラブの春」の現状と課題——』25-35.
- 2013. 「アラブ首長国連邦——ムスリム同胞団の影響に揺れる——」『季刊アラブ』(145) 夏号 12.
- 2016. 「殉教と愛国——UAE にとってのイエメン内戦——」『アジ研ワールド・トレンド』(248) 6月 24-27.

## &lt; 英語文献 &gt;

- Abdulla, Abdulkhaleq 2010. *Contemporary Socio-Political Issues of the Arab Gulf Moment*, London: Center for the Study of Global Governance.
- Alsharekh, Alanoud, and Robert Springborg 2008. *Popular Culture and Political Identity in the Arab Gulf States*, London: Saqi.
- Cooke, Miriam 2014. *Tribal Modern: Branding New Nations in the Arab Gulf*, Berkeley: University of California Press.
- Davidson, Christopher M. 2012. *After the Sheikhs: The Coming Collapse of the Gulf Monarchies*, London: Hurst.
- Forstenlechner, Ingo, Emilie Rutledge, and Rashed Salem Alnuaimi 2012. "The UAE, The 'Arab Spring' and Different Types of Dissent," *Middle East Policy* 19 (4) Winter: 54-67.
- Horinuki, Koji 2013. "An Independency in a State of Dependency: Socio-Economic Challenges and Politics in the Northern Emirates of the UAE," unpublished paper for the 29th Annual Meeting of the Japan Association for Middle East Studies, at Osaka University, 11-12 May.
- Luomi, Mari 2012. *The Gulf Monarchies and Climate Change: Abu Dhabi and Qatar in an Era of Natural Unsustainability*, London: Hurst.
- Menaldo, Victor 2012. "The Middle East and North Africa's Resilient Monarchs," *The Journal of Politics* 74 (3) July: 707-722.
- Neuhof, Florian 2011. "Protests Fail to Garner Support. (Governance)" *MEED* 55 (21) 27 May-2 June: 32-33.
- Patrick, Neil 2012. "Nationalism in the Gulf States," In *The Transformation of the Gulf: Politics, Economics and the Global Order*, edited by David Held and Kristian Ulrichsen, London: Routledge, 47-65
- Podeh, Elie 2011. *The Politics of National Celebrations in the Arab Middle East*, New York: Cambridge University Press.
- Al-Qassemi, Sultan 2012. "Tribalism in the Arabian Peninsula: It's A Family Affair," *al-Arabiya News*, 3 February, 2012.
- Ulrichsen, Kristian C. 2012. *Small States with a Big Role: Qatar and the United Arab Emirates in the Wake of the Arab Spring* (Discussion paper) Durham: Durham University.

## &lt; 新聞 &gt;

*Emirates* 24/7  
*Gulf News*  
*al-Ittihad*  
*The National*